

about○○

井口由菜

a
b
o
u
t
○
○

授業終了のチャイムが鳴る。眠気と戦いシンンとしていた教室が一気に賑やかになり、クラスメイトたちは昼休み開始と同時にガタガタと席を立ち始めた。

四月の下旬。新しい環境、初めての顔ぶれで時間を過ごすようになって二ヶ月。私からすればまだ二ヶ月しか経っていないのだが、クラスメイトたちはずつと前から一緒にいるかのように親しげだ。

そんな中、私だけが、このクラスに馴染めないでいる。

数ヶ月前までは、比較的誰とでも気兼ねなく話せる無邪気で明るい人間だった。今の自分からは想像できないほどに。

そうでなくなってしまったのは、中学三年生の頃だった。同じクラスですつと仲良くしていたはずの友達二人から突然無視されるようになったのだ。それでもしばらくは何とか日々をやり過ごしていたのだが、私たちがギクシヤクしていることに気がついた担任は、私たちを会議室に呼び出し、仲直りをするように言った。その場で仲直りをし、事態は落ち着いたかのように思われたが、次の日から二人の無視はどんどんエスカレートし、クラス全体に広がっていった。表面上は仲直りをしているから、担任にはバレないように、やり方はより陰湿になった。クラスの誰からも相手にされず、全員が敵に見える毎日。

その時私は生まれて初めて「独り」になった。

無邪気で明るかったはずの私は、この出来事を機に何をするにも臆病になった。十五年間かけて培ってきた性格なのに、あまりにも簡単に変わってしまうのだからやるせない。

とはいえ高校生になれば周りの環境も人間も変わるのだから、切り替えてまっさらな気持ちで向き合えばいい。頭では分かっていたし、実際にそうする努力もした。だが私はクラスの「みんな」を怖いと思うようになった。適当なグループに混ざって、輪の中にいようと必死になった時期もあったが、どうしても作った笑顔が引き攣った。しんどい。でも嫌われたくない。つまらないやつだと思われていたらどうしよう。そんなことばかり考えて、上手く話せなくなつた。結局そのグループからは離れて一人での時間が増えていき、入学当初は頻繁に話しかけてくれた後ろの席の女の子とすら、次第に疎遠になつた。

また辛い思いをするくらいなら一人でいた方がきつといい。しかしそうして強がる気持ちの裏では、寂しさや羨ましさ、「どうして私は普通の高校生活を送れないのだろうか」という苛立ちが不意に見え隠れすることもある。

結局私は、あの出来事をずっと引きずっている。私を無視した二人は、当時のクラスメイトたちは、今頃華々しい高校生活を送っているのだろうか。

ここ数日は雨模様が続いており、今日も大粒の雨が降っていた。そんな雨も昼過ぎから次第に弱まり、授業が終わる頃にはわずかに晴れ間も見え始めた。太陽の光が反射し、キラキラと輝き揺れている水たまりに目を落としながら歩いていると、後ろから名前を呼ばれた。

「玲ちゃん」

振り返ると、声の主は家が近所で一つ上の幼なじみ、かつ同じ高校に通っている皐月ちゃんだった。彼女は気の合う友達であり、頼れるお姉ちゃんのような存在でもある。幼稚園、小・中学校に加え高校も同じなのはただの偶然ではなく、私が皐月ちゃんと同じ高校に通いたいがために死に物狂いで勉強したからなのだが、恥ずかしいので内緒にしている。

「皐月ちゃん。今帰り？」

横に並んだ皐月ちゃんに尋ねた。彼女を前にすると自然と頬が緩む。

「うん。さつきまで図書館で数学の宿題と戦ってた」

皐月ちゃんはおくびを噛み殺しながら答えた。

学年の違いもあり会うことが少なくなっていた今でも、皐月ちゃんとはこうして時々帰路を共にする。一緒に帰るたび、私は教室で喋らなかつた分を取り戻すかのように何で

も臯月ちゃんに話していた。親にも言っていない辛かったあの時期のことだって、臯月ちゃんだけは知っている。臯月ちゃんに話を聞いてもらっていないかったら、私は今頃どうなっていたか分からない。

いつものように何でもない会話を重ねながら歩いている間に、あつという間に家の近くまで来てしまった。臯月ちゃんの隣は、高校や教室という狭い世界から離れ、自分らしくいられる場所だ。日々をふらふらになりながら何とか走っている私をそつと癒してくれる彼女は、私にとつて何よりの葉だ。

3

梅雨が明け、息つく間もなく夏が目の前に迫っていた。昨年までは長袖のブラウスの袖を捲つて暑さを凌いでいたが、今年はすでにそれでは耐えられそうにないほど蒸し暑い。そのためここ最近、入学前に予備程度に買っておいた半袖のブラウスが予想外の活躍を見せている。

木曜日は職員会議のため全学年が同じ時間に授業が終わる。まつすぐに帰る日もあれば、空き教室をふたり占めしたり、時々寄り道したりする日もある。今日は恒例の空き教室コースだ。

空き教室は校舎の一番端にある。例年より入学者数が少なく余ってしまったそこは、他の教室と同じように机と椅子が並べられているのにどこかがらんと寂しい雰囲気がある。しかしどのクラスの色にも染まっていないこの教室は妙に居心地が良く、密かに気に入っていた。

今日は皐月ちゃんに、どうしても解けない化学基礎の宿題を教えてもらっていたのだが。

「おーい。大丈夫？」

最近の皐月ちゃんは何か変だ。今日に限らず、ここ最近の皐月ちゃんは時々、心ここにあらずといった様子でぼんやりと虚空を見つめている。

「あ、うん。ごめん」

声をかけると、我に返った皐月ちゃんは慌てて表情を笑顔に戻した。

「皐月ちゃん、最近元氣ない？」

「え……何で？」

皐月ちゃんの瞳が揺れる。

「いつもより顔が暗い気がして。勘違いだったらごめん」

「ううん。……実は進路のことであつと悩んで。玲ちゃん鋭いなあ」

皐月ちゃんは少しの間の後そう答えると、先ほど自販機で買ったばかりなのにもううつすらと汗をかき始めた小さなペットボトルの蓋を開け、一口含んだ。

大学受験のことは三年生になつてから考えればいいものとはばかり思っていたが、そう

でもないらしい。今から悩んでいるなんて、すっかりしている皐月ちゃんらしいな、と呑気に思う。とはいえ私にとつてもそう遠くない話だ。

「まだ二年生なのに進路か……。目の前のことで精一杯なのに、何でこんなに急かされなきゃいけないんだろう。私も憂鬱だな」

「でも、玲ちゃん賢いでしょ？」

「そんなことないよ。今だって授業ついていくのに精一杯だし……。そうだ皐月ちゃん、私が受験生になつたら勉強教えてよ」

「勉強会かあ。いいね、楽しそう。そのためにはまず私がちゃんと受験合格しないとだね」

話しているうちに皐月ちゃんにはいつもの笑顔が戻っていた。心の中にあつた小さな引つ掛かりも、移りゆく話題に身を任せているうちにどこかへ流れていった。

4

期末テストを乗り越え、来たる夏休み。私たちはお互いの家を行き来してゲームをしたり、お泊まり会をしたり、少し足を伸ばして遠出したりもした。高校生になつたとはいえ行動範囲はたかが知れているが、一つ大人になつた気がして心が弾む。

その日は電車を乗り継いで街に出かけた。映画を観て、ショッピングモールで洋服や雑貨を見ながら歩き回っているとだんだん足が疲れてきたので、どこか店に入って休憩しようとしてグルグルとあたりをさまよう。

「どこも空いてないね」

時刻はもうすぐ四時。みんな考えることは一緒のようで、どこもかしこも混み合っている。どうしようかと頭を悩ませていると、ある考えが浮かんだ。

「あ、ねえ、観覧車とかどう？」

このショッピングモールの最上階には観覧車がある。観覧車であれば滞在時間は短くなってしまうが、長居するという概念がないから少し待っていれば確実に乗れるし、座って景色も楽しめる。

「観覧車か。確かにありかも」

臯月ちゃんから前向きな返事を得られたので、さつそく観覧車へ向かう。エレベーターで最上階まで上がると、乗り場は人もまばらで空いているようだった。

チケットを買い、案内に従って乗り込む。

「観覧車なんて久しぶりだろう……」

「私も覚えてないや。でもこんな都会の真ん中で観覧車に乗れるって新鮮だね」

そう言つて臯月ちゃんが窓の外に目を向ける。ゴンドラがゆつくりと上昇していくのを感じながら、私も窓の外に視線を移した。

しばらく二人とも黙ったまま景色を見ていた。自分たちのいる場所が、普段は見上げているビル群よりも高くなつていく。街の喧騒から離れ、小さく静かな箱の中でこんなふうにはんやりと外を眺めているのは、何だか心地がいい。

「建物も人も、全部小さいね」

皐月ちゃんが口を開く。

「ね。月並みな表現だけど、私たちのいる世界がちつぽけに感じるね」

「うん。あの中にいると、今見えている世界だけが全てだと思つて窮屈になるけど、こ
うやって見渡してみると、居場所はあるそこだけじゃないんだよね」

そう呟く皐月ちゃんに視線を戻すと、皐月ちゃんもそれに気づいて口角を上げる。
につこりというよりも、無理やり笑おうとしている感じ。こんな顔の皐月ちゃんは、今ま
で見たことがない。

「皐月ちゃん、やつぱり何か……」

悩みがあるんじゃないの、と続けるより先に、皐月ちゃんは、

「ごめんごめん、進路ごときに大げさだよね」

と言つて話を切り上げ、

「ねえ、そろそろ頂上じゃない？」

と明るい調子を取り戻して言った。

「あ………本当だ」

いつの間にか随分高いところまで来ていた。私たちが乗っているゴンドラが他のどのゴ

ンドラよりも高い位置に来る。しかし一番上にいられる時間は案外短く、あっという間に下降し始めた。

「後は下がるだけかあ。何か寂しい」

皐月ちゃんが残念そうに言う。頂上を過ぎ、ただ地上に着くのを待つだけの時間は思っていたより耐え難い。私は思わず

「もう一周する？」

と口にしていった。皐月ちゃんは一瞬目を丸くしたが、すぐにニヤリとして

「しっちゃう？」

と聞き返してきた。

幼い頃、親に隠れて小さくないはずらを働いていた時の顔と同じ。皐月ちゃんが見せる無邪気な顔はいくつになっても変わらなくて、そんなところが好きだなと思う。そして皐月ちゃんという時は、少しでも自分のことも好きになれるのだ。

「しっちゃおう！」

現実を先延ばしにしたいだけだと言ったらそれまでだけど、地上に降りる楽しみができた。地上に着くと、私たちは一度ゴンドラを降りて本日二枚目のチケットを買い、再び観覧車での空の旅に向かった。

夏休みはまもなく終わり、また毎日学校へ行かなければならない毎日が始まってしまふ。秋は文化祭や体育祭と、クラス単位で行う行事が多く気が重い。でも、どれだけ憂

鬱で、迎えたくない明日が控えていても、皐月ちゃんと会うと「何とかなるかも」と思える。体力は消耗しているはずなのに、不思議と会う前よりも元気になっている。皐月ちゃんと過ごす時間があれば、この先も何とか踏ん張れる気がした。

5

二学期が始まってからも私たちは定期的に一緒に帰り、たまに寄り道もした。皐月ちゃんの顔からはこれまで時折見せていた暗い表情はなくなり、いつも通りの皐月ちゃんに戻ったように思われた。

暑さが落ち着き、ようやく過ごしやすくなってきたある日のこと。体育の授業を終えて制服に着替えた私は、教室へ戻るため、中庭を一人小走りしていた。すると中ほどにあるベンチに、見慣れた人影を見つけた。

「皐月ちゃん？」

俯いて座っていた彼女はおずおすと顔を上げた。目が赤い。

「どうしたの？ 大丈夫？」

もしかしたら泣いていたのだろうか。再び俯いてしまった皐月ちゃんの隣に座って背

中をさするが、彼女は何も言わない。

しばらくそうしていたが、ふと我に返って時計を見ると、次の授業が始まるまで二分を切っていた。時間に厳しい先生だから、遅刻するとまずい。

「皐月ちゃん、授業始まつちゃうよ。そろそろ行かなきゃ」

声をかけても、皐月ちゃんは動こうとしない。

「ごめん、先行くね」

本当はずつとこうしてそばにいたかったが、時間は刻一刻と迫っている。私は後ろ髪を引かれる思いでその場を去った。

時間には間に合ったが、残してきた皐月ちゃんのことを心配で仕方がなかった。授業が終わつてすぐにスマートフォンを取り出すと、皐月ちゃんから「体調が悪くて早退します。さつきは心配かけてごめんね」とメッセージが来ていた。

次の日、学校に行けそうか連絡するよりも先に「体調が戻らなくて今日も休みます、でも大丈夫だから心配しないでね!」とのメッセージが送られてきた。

皐月ちゃんが早退した日はいつも一緒に帰る約束をしている木曜日で、今日も休むということはそのまま土日に入ってしまったため、次に会えるのは月曜日になる。お見舞いに行つてもいいか聞くと、「もう大丈夫! 月曜日会おうね」と返信が来たので、大人しく月曜日を待つことにした。

月曜日。いつものように下駄箱で皐月ちゃんを待つ。が、待てど暮らせど現れなかった彼女が今まで約束をすつぽかしたことはなかったし、一緒に帰れなくなつた時は必ず連絡があつたが、今日はそれも無い。

皐月ちゃんの教室に行つてみても、彼女の姿はなかった。こうなつたら、と直接家に行くことに決めた。「ごめん！ うっかりしてた」と玄関の扉の隙間からひよつこりと顔を出してくれたらしい。そうしたら「三十分は待つてたんですけどー」って、内心ホッと胸を撫で下ろしながら言い返してやる。

重い荷物を下ろすため、一度家に寄る。玄関を開けると、私に気づいた母が駆け寄つてきた。

「ただいま……どうしたの？」

こわばつた表情の母を見て、思わず聞く。何だろう、ひどく胸騒ぎがする。

母は大きく息を吐くと、

「皐月ちゃん、今日の朝、自分の部屋で亡くなつていたつて……」

と言つた。その言葉は、到底信じ難いものだった。

「え、何で？ 風邪つて聞いてたけど……体調、そんなに酷かつたの？」

矢継ぎ早に聞く私に、母は泣きそうになるのを必死に堪えながら

「それが……状況的に、自殺だろうつて」

と答えた。

続けられた言葉は、私をもつと混乱させた。自殺。その単語に現実味がなくて、すぐに

理解することができない。
涙が流れる。だけどその量は思ったよりも少なく、臯月ちゃんが死んでしまったというのにこんなにも泣けないものかと自分の神経を疑った。

歯止めが効かないほど声を上げて泣いたのは、少しでも眠った方がいいと母に促されてベッドに横になり、目を瞑った時だった。できるだけ何も考えないようにしていたのに、幼稚園から続いた数え切れないほどの記憶と臯月ちゃん的笑顔が脳内に染み出して、でももう一生思い出が更新されることはないのだと、今になってようやく気がついたのだ。

6

臯月ちゃんはどうして自ら命を絶ったのだろう。どうして、何も言ってくれなかったのだろう。

臯月ちゃんがいなくなつてから、私はずっとそればかり考えていた。
いや、それ以前に、私が気づくことはできなかったのだろうか。

振り返ってみると、思い当たる節はいくつもあつた。時折見せた浮かない表情、放課後の教室でのこと、観覧車での言葉。進路で悩んでいると言っていたが、本当にそうだった

のだろうか。

最も悔やまれるのは、最後に会ったあの日、明らかに様子が変だった彼女のそばを離れてしまったことだった。

普段滅多に弱さを見せない彼女があんなふうになっていて、ただごとではないと分かっていたはずなのに、授業が始まるとか先生が厳しいとか、どうしてそんなくだらぬ理由で彼女を置いていったのだろうか。

月曜日を待たずに、無理やりでも土日に家に押し掛ければよかった。そして片時も離れず臯月ちゃんに張り付いていればよかった。鬱陶しがられてもいいから、もつと踏み込んで話を聞いていればよかった。思えばいつも私ばかり話を聞いてもらっていた。もつと、もつと……今更どうしようもないことばかりが脳内を駆け巡り、後悔ばかりが募る。

小さい頃からずつと一緒について、臯月ちゃんのことなら何でも知っているつもりでいた。彼女の理解者であると信じて疑わなかった。しかし彼女が死んで、私は彼女のことを何も知らなかったのだと思ひ知らされた。

臯月ちゃんがいなくなつてから、死んだように生きていた。

文化祭も体育祭も参加せず、クラスでは以前にも増して浮いた存在になった。進級するための出席日数を稼ぐためだけに学校に通う毎日は、あまりにつまらないものだった。

今年も残すところ一ヶ月を切った。

今日は先生との二者面談がある。二者面談といっても堅苦しいものではなく、「最近どうだ」「何か困ったことはないか」といった形式的な質問が多い。

放課後に数名ずつ行われるのだが、私の前には三名控えているため順番が来るまではまだ時間がある。時間を潰すために校内を当てもなく歩いてみると、足は無意識のうちにあの空き教室に向かっていた。

皐月ちゃんとの思い出が蘇ってしまうから来ないようにしていたのに、無意識というのは恐ろしいものだ。

せっかくここまで来たのだから、と誰に對してもない言い訳をし、久しぶりに教室に足を踏み入れる。中はひんやりとしていた。

私たちの定位置は、広い教室の中で最も窓に近い列の中間の席だった。皐月ちゃんが前で、私が後ろ。「前後で座った方が、隣同士で座るよりも近くて話しやすくない？」と言つてはにかむ皐月ちゃんの顔が浮かぶ。

椅子に腰を下ろし、窓の外を見る。日が経つにつれどんどん日が短くなつていて、空はもううつすらとオレンジがかつている。私はただぼうつと、濃くなつていくオレンジが空の青と混ざつていく様子を眺めていた。

こんな風にうっかり頭の中を空っぽにしていると、すぐに皐月ちゃんとの思い出が顔を出しては私を掻き乱す。そして「どうして」という、どれだけ考えたところで答えに辿り着くことのできない問いを繰り返してしまうのだ。

「まただ……」

我に帰り、思い出に浸る意識を強制的に呼び戻す。教室に戻ろうと視線を戻したその時、前の机の中にある、あるものが目に留まった。

それは一冊のノートだった。この教室は普段授業では使われていないのに、なぜノートが入っているのだろうか。

立ち上がりノートに手を伸ばす。表紙に書かれた名前を見て、私は思わず声を上げた。「皐月ちゃんの……?」

表紙にははつきりと「成田皐月」と書かれている。何かの拍子に出して、そのまま忘れて帰ったのだろうか。

ノートを開いてみる。ぎつしりと書き込まれた数式や図から察するに、このノートは数学の問題集を解くのに使っていたようだ。そういえば前にも数学の宿題をするために図書館に寄っていたと言っていたっけ。

ノートをパラパラと捲っていると、もうすぐ半分に達しそうなところでページは真っ白になった。まだあまり使っていないかっただな、と思いつながらそのままの勢いでページを捲り続けていると、ページは皐月ちゃんの筆跡で埋め尽くされた。でもそこに書かれているのは数式ではなく文字である。

表紙に書かれた名前とは真逆の殴り書きの文字を目で追う。日付は飛び飛びではあるが、それは日記のようなものだった。

六月二十六日(月)

最近、クラスのみんなど上手くいっていない。

上手くいっていないというか、何を話しかけても無視される。空気みたい。

そんな私を見て、あの人たちはクスクス笑ってる。気分が悪い。

もうすぐ期末なのに、集中削がれて嫌だなあ。

七月十四日(金)

今までは無視されるくらいで済んでいたけど、今日は私の分だけプリントが回ってこなくてさすがに迷惑だった。

私が一番後ろの席なのをいいことに、同じ列の誰かが一枚多く取ってわざと私の分を足りなくしてるんだと思う。

その度に先生に一枚足りないって言って取りに行くの申し訳ないな。

先生は毎回「おかしいなあ、ごめんね、気をつけるね」って言ってくれるけど、先生、何も悪くありません。私の方がごめんなさい。ていうか私が謝るのもおかしいか。

八月二十七日(月)

今日は始業式だった。早々に最悪だった。

クラスで無視されたり居心地が悪くても、これまでは一緒にいてくれる人がいたから我慢できてた。だけどその一緒にいてくれた子までもが、私から離れていった。

朝いつも通りに話しかけに行ったら、目も合わせず教室から出て行った。その様子を
見てあの人たちはまたクスクス笑ってた。辛い。悲しい。味方でいてくれると思ってたのに。
夏休みの間に何か吹き込まれたのか、自分の意思で離れていったのかは分からないけど、
これでクラスで話せる人は誰もいなくなってしまった。これからどうすればいい？

十月五日(金)

学校が始まって結構経つけど、状況は日に日に悪化してる。

無視だけじゃ済まず、私にはつきり聞こえる声で悪口を言われるようになった。

「うざい」「でしゃばり」「調子乗ってる」「八方美人」「目障り」って、全然絡みがない人まで
私あなたたちに何か迷惑かけたっけ。

一緒にいてくれる人もいないしやることもエスカレートしてて、泣いたらあいつらの思
う壺だけど、泣きそう。こんな時、最悪の選択肢が頭をよぎってしまう。そしてその度に、
ダメだと思つて必死にかき消す。

十月十一日(木)

今日は現代文の課題提出がある日だった。

授業の前にトイレに行つて戻ってきたら、机の上に置いておいた手書きのレポートがびしょびしょに濡れていた。それも、私の水筒のお茶がひっくり返されて。

慌てて倒れてた水筒を起こしたけど、もう手遅れ。文字が滲んでとても読めそうになかった。「これから提出なのに可哀想〜」っていう声が聞こえて、あああいつがやったんだなつて察した。そしてこうやつて言うことで、もし私が先生に言つても、私が自分でこぼしたんだつて周囲に口裏を合わせさせるつもりなんだなつて気づいた。本当に姑息。

何かが切れた。もうどうでもよくなつた。消えてしまいたい。教室を飛び出して中庭で泣いてたら玲ちゃんが来た。びっくりしたのとこんな顔見せたくないのとで、ずっと下向いて何も言えなかつた。授業の時間が来て玲ちゃんが行つちやつたけど、せつかく心配してるのに無愛想だつて思つたかな。嫌われちやつたかな。ごめんね。

今日は結局早退した。でもこんな顔でこんな時間に家に帰つたらお母さんに心配されるから、いつもの空き教室に避難して現在に至る。毎日通う教室がここだったらよかつたのにな。

読み進めていくと、私の知らなかつた玲ちゃんの戦いが、葛藤が、悲しみが、苦しみが、

切実に綴られていた。想像しただけで胸が切り裂かれたように苦しくなる。私が知りたかつた皐月ちゃんの死の真相は、あまりにも辛く悲しいものだった。

そして悲しみと同時に、ずっとそばにいたのに皐月ちゃんを助けられなかったことと、そばにいたのに相談してもらえなかつたことに対するショックに支配された。

でも今思えば、皐月ちゃんという時、私はちゃんと皐月ちゃんの話聞いていただろうか。いつも私のことばかりだったから、皐月ちゃんは自分の話がでなかつたのかもしれない。もしそうなら今回のことには私も責任があるのでは……。

二年四組、三島玲さん。校内にいましたら、至急二年四組の教室に来てください」

突如鳴り響く校内放送にビクッと体が反応した。しまった。二者面談の存在をすっかり忘れていた。時計を見ると、本来であればもう面談を終えている時間だった。

皐月ちゃんのノートを手につつままま、急いで教室に戻る。先生を怒らせてしまったかと焦つたが、当の本人は

「今日面談あること忘れて帰っちゃったかと思つたよー」と言いつつ、

「まあ今日はあと三島さんだけだからいいんだけどね」

と笑つて流してくれた。

担任の奥谷先生は体育の担当で、サバサバとした女性の先生だ。あまり生徒に干渉しすぎずさつぱりとした関わり方はこちらとしても気楽だが、一方で少し怖くもある。

「もうすぐ二学期も終わるけど、学校生活はどう？」

「そうですね……特に何もなく、普通です」

「そつか。文化祭も体育祭も来なかつたから気になつてたんだけど、クラスにちゃんと仲良い人とか、話せる人いる？」

先生は入学当初から何かと私を気にかけてくれる。しかし中学三年の一件以来、教師というものもあまり信用できなくなっている私は、

「いえ……いません。たまたま同じクラスになつただけの人たちの中で、無理して友達を作るのが、何だかしんどくて」

と、最低限の文章で淡々と述べた。

「うん、それもそつか。同じクラスになつた人の中に必ず気が合う人がいるとは限らないもんね」

私の返事を特に気に留めることもなく、先生はあつさりと言つた。

「じゃあさ、クラスの人以外にはいるの？ 仲良い人」

先生は続けて聞いてきた。

「嫌だつたら答えなくていいんだけど、やつぱりそういう人が一人でもいると違うからさ」

その質問の答えとして浮かぶのは一人。でも、彼女はもういない。

黙つたままの私に、先生は

「ごめん、踏み込みすぎだね」

と言つて話を切り上げた。

その後いくつかの問答を終え、先生が

「最後に何かある？」

と聞く。膝に乗せたノートにそつと触れる。

話すべきだろうか。でも話したところで何になるというのだろうか。先生に知られることとで逆に事態が悪化してしまう可能性があることは、身をもって知っている。それにつきつと学校側は、いじめの存在を知ってもそれを明るみにはしたがらないだろう。大ごとにならないように処理されてしまうことだつて考えられる。

「三島さん？」

私の顔を覗き込んできた先生と目が合う。

「特にないです」

とだけ返すと、先生は

「……そう」

と言つてそれ以上は何も言わなかった。

8

その週の土曜日。

いい加減目を覚ませと言わんばかりに鳴り響くおそらく五度目のアラームで重たい体を起こし、朝昼兼用の食事を済ませてソファに寝転ぶ。あのノートはどうするべきだろうか。私がついていていいのだろうか。

ぼんやりと考えていると、キッチンにいた母がやってきて「ちよつとそつち寄つて」と言つて空いたスペースに腰掛けた。そして

「この前、皐月ちゃんのお母さんに会つてね」と切り出した。

名前を聞くと未だにドキツとする。どれだけ時間をかけても、彼女を失つたこととぼつかりと空いた心の穴は埋まりそうにない。

「……なに？」

体を起こして次の言葉を待つ。

「もし嫌じゃなければ、学校が始まる前に、一度家に来てくれないかつて」

言葉に詰まる。皐月ちゃんの家にはお通夜の時から行っていない。「行けていない」という言い方が、気持ちとしては正しい。

「皐月ちゃんに、会つておいでよ」

「会う」という言い回しをすることで、母のあたたかさを感じる。

それに、今私の手元にあるノートは、皐月ちゃんのお母さんには絶対に見せなければならぬものだ。母に連絡を取ってもらい、私は皐月ちゃんのお母さんと会うことを決めた。

翌日の昼下がりに、私は久しぶりに皐月ちゃんの家を訪れた。

「来てくれてありがとう。さ、上がって」

出迎えてくれた皐月ちゃんのお母さんに、入つてすぐ右にある和室に通される。小学生の頃、皐月ちゃんとボードゲームをする時に、よくこの広い部屋を使わせてもらったことを思い出す。

仏壇に手を合わせる。皐月ちゃん……蓋をしていた気持ちが溢れて涙に変わる。言いたいことの半分も言えなかつた。

こうして家に来ると、今にも皐月ちゃんが「来るなら前もって言つてよ」と不満そうに言いながら階段を降りてきそうな気がする。ここで仏壇に手を合わせてもなお、そんな幻想を抱かずにはいられない。

「ごめんね玲ちゃん。皐月のことでたくさん悲しませて、苦しませてしまつて」

お茶が入ったグラスが置かれたローテーブルを挟んで正面に座つたお母さんが頭を下げる。

私はその言葉に、黙つて首を横に振ることしかできなかつた。こういう時、すぐに相手を氣遣う言葉をかけられない自分がかししい。

少しの静寂の後、皐月ちゃんのお母さんは自分のお茶を一口飲むと、改まった口調でこう切り出した。

「実は今日は見せたいものがあつて来てもらったの」

何だろう。私も座り直して姿勢を正し、言葉の続きを待つ。

「臯月の部屋を整理していたら、これを見つけてね」

そう言つてテーブルの上に置かれたのは、真つ白な封筒だった。懐かしい文字で「玲ちゃんへ」と宛名が書かれている。

「私宛に？」

「ええ。よかつたら、読んであげて」

一体何が書かれているのだろうか。私は大きく脈打つ鼓動を抑えながら、封筒の中から取り出した便箋に目を落とした。

玲ちゃんへ

今これを読んでるつてことは、もう私はいないんだよね。

悲しませてしまつていたら、ごめんさい。実は、私はクラスで嫌がらせを受けていました。

もう疲れてしまつて、耐えられなくなりました。

何で今更つて、ここに書いていなくなるくらいなら話してくれたらよかつたのについて思つたよね。でも、できなかつた。

玲ちゃんに話すことで、私は楽になれたかもしれないけど、でも玲ちゃんに中学の時

のことを思い出させたくなかったし、辛い思いさせたくなかったし、何より、玲ちゃんといえる時は嫌なことは忘れて楽しいことだけ考えていたかった。玲ちゃんの隣は私の大切な居場所だったから。玲ちゃんのことや玲ちゃんという時間を汚したくなくて、何も言わなくてごめんね。結果的に、すごく苦しめてしまったよね。

でも実際に、玲ちゃんという時だけは、心に深く刺さってしまったって抜けない汚い言葉やクラスメイトのことを忘れられた。目を閉じたら、玲ちゃんとのたくさんの思い出や玲ちゃんの写真が浮かんでくる。玲ちゃん存在に、数え切れないほど助けられたよ。

それなのにこんな選択をしてごめんなさい。もう疲れちゃった。
玲ちゃんと過ごした時間は本当に大切な宝物です。
ありがとう。ごめんね。

涙を堪えながら読んでいたが、ついに耐えきれず大粒の涙が頬を伝った。

いつも助けられていたのは私の方だ。皐月ちゃん存在には感謝してもしきれないほど救われていた。それなのに私は皐月ちゃんを助けられなかった。皐月ちゃんからもらったものを、私も返したかった。

文章の中で皐月ちゃんは何度も「ごめん」と言っているが、謝るのは皐月ちゃんの苦しみに気づけなかった私の方だ。でも誰より、皐月ちゃんをいじめていた人たちに謝って欲

しい。謝られたところで臯月ちゃんは帰ってこないけれど、それでも謝って欲しい。

様々な感情が押し寄せたが、ひとまず落ち着こうと、深く息を吸っては吐いてを繰り返す。次は、私の番だ。

「実は私も、お見せしたいものがあるんです」

「えっ。何かしら」

想定していなかったであろう私の言葉に、臯月ちゃんのお母さんは戸惑った表情を見せる。

私は持つてきたトートバッグからノートを取り出し、臯月ちゃんのお母さんの前に置いた。

「これ、よく放課後に遊んでいた教室で見つけて。ここに……臯月ちゃんがクラスでできてきたことが、書いてあったんです」

私の言葉を聞くなり、臯月ちゃんのお母さんはノートを手に取り、中身を読み始めた。読み進めるにつれ、彼女の目にもみるみるうちに涙が溜まっていく。溢れそうになるたびに指で拭い、再び文章を追いかける。

読み終えた彼女は、ふうつと深く息を吐き、

「私宛ての手紙にもいじめられていたことは書かれていたけれど、ここまで詳しいことは初めて知ったわ……。玲ちゃん、持つてきてくれてありがとうね」

「ありがとう」という臯月ちゃんのお母さんの言葉に、目頭が熱くなる。

「そんな、私は何も……。むしろ、あんなに一緒にいたのに、全然知らなくて……。すみま

せん。もし気づいていたら、助けられたかもしれないのに。私たちが一緒に過ごした時間って、何だったんだろう……」

言っている途中で、ポロポロと涙がこぼれて止まらなくなつた。そんな私の様子を見た皐月ちゃんのお母さんは、立ち上がつて私の背中をトントンと叩く。

「玲ちゃん。皐月はあなたにはじめのことを話していなかったみたいけど、知らなかったのは私も一緒。だからこのことであなたたち二人が重ねた時間全てを否定する必要はないわ。玲ちゃんが今まで見てきた皐月だつて、確かに皐月だつたんだから」

止めどなく流れ続ける涙。それには色々な感情が混ざっていた。悲しみ、苦しみ、後悔、でもそれだけではない。

皐月ちゃんのお母さんの言葉に、皐月ちゃんと一人で過ごした思い出をこれからも大切に持ち続けてよいのだと肯定してもらえたような気がして、心が少しだけ軽くなつた。

長い時間をかけてようやくやく落ち着いた。異常なまでの瞼の重さに、目がパンパンに腫れていることを否が応でも教えられる。

「あの……このノートなんですけど」

「うん？」

「はじめがあつた証拠として、先生に見せたら……今からでも、何か変わるでしょうか。私、このまま何事もなかったかのように毎日が進んでいくのは、やっぱり嫌で……」

「うん」

臯月ちゃんのお母さんは、静かに私の話に耳を傾けてくれている。

「でも先生に言ったところで何も変わらないんじゃないかって思いもあつて。きつと大ごとにはしたがるまいだろうし、下手したらなかつたことにされるかもしれないって思うと……」

臯月ちゃんのお母さんは少し考えた後、

「玲ちゃん、ノートのことは、親として私がやるべきことだとも思うし、玲ちゃんが背負いすぎることないのよ」

と言った。そして二呼吸置いて、さらに続けた。

「世の中にいる人は決して信用できる人ばかりじゃないから、玲ちゃんが先生たちに対してそう思う気持ち、私もすごく分かる。でもどこかに必ず、あなたに寄り添ってくれる人もいることも、覚えておいて欲しい」

臯月ちゃんのお母さんの言葉が、すつと心に沁みていく。いいだろうか、頼つても。信用しても。もし跳ね返されたら？ ……きつとまた辛い思いをするかもしれない。でもそこでへこたれずに、その時はまた、別の人を探せばいいだけだ。

臯月ちゃんのお母さんは続ける。

「でも本当に、臯月のことは一人で抱え込まないでね。玲ちゃんには玲ちゃんの人生があるんだから」

臯月ちゃんのお母さんは終始優しい口調で私に語りかける。でも言葉の一つ一つには、強く思いが込められているのが分かる。

それをきちんと受け取った上で、今回のことや自分自身に向き合いたいと思った。だから。

「はい。もちろんです。自分の人生を生きていくために……このノートのこととは、私にやらせてもらえないでしょうか」

私はまっすぐに言った。

皐月ちゃんのお母さんはそんな私を見て

「うん。分かった」

と言って優しく微笑んだ。

9

皐月ちゃんの家を訪れた翌日の月曜日。

私は放課後、普段減多に行くことのない職員室へ向かった。

「ん、どうした？」

職員室から出てきた奥谷先生は軽い調子で言う。

私は深呼吸をして、

「本当は二年生の先生を呼ぶべきなのかもしれないんですけど、奥谷先生の方が話し

やすいので。……この前亡くなった二年生の成田臯月さんのことでお話したいことがあつて」

と切り出した。

私の言葉を聞き、先生は真剣な顔つきになった。そして

「落ち着いて話せるところがいいよね」

と言つて会議室を開けてくれた。

初めて入る会議室は、想像していたよりも広かつた。奥谷先生はパチパチと電気をつけ、「寒いな」と呟くと、エアコンのスイッチを入れて入り口近くのパイプ椅子に腰掛けた。私もその隣に座る。

「それで、話つていろいろのは？」

「先生、この前の面談の時に「クラスの人以外に仲良い人はいるのか」つておっしゃつてたじゃないですか」

「うん」

「いたんです、仲良い人。それが成田臯月さんでした。成田さんとおは幼なじみですつと仲が良くて。でもその時にはもう亡くなつていたので、咄嗟に答えられなくて……すみませんでした」

「そうだったんだ。ごめんね、何も考えずに聞いてしまつて」

「そんな。先生が謝ることじゃないです。……それで、この前、これを見つけたんです」

私はリュックからノートを取り出し、先生の前に置いた。

「成田さんのノート?」

「はい。しばらく捲ったところから読んでいただけませんか」

先生は言われた通りノートを捲り、該当のページに辿り着くと、そのまま読み始めた。

「これって……」

先生は震える声で言う。私は

「臯月ちゃん、クラスでいじめを受けていたんです」

と答えた。

先生は私の言葉を聞いた後も、何も言わずに黙々とノートを読んでいた。全て読み終えると、静かにノートを閉じてそっと机に置いた。

「初めて知った。成田さんがいじめを苦に亡くなったことも、そもそもいじめがあったことすらも」

先生は体ごとこちらを向き、まつすぐに私を見つめて

「教えてくれてありがとう。いじめは絶対に許しちゃいけない。このことは私が責任を持つて報告します」

と言った。先生の瞳は涙で揺れている。

いじめの事実を伝えられたことと、奥谷先生がそれをしつかりと受け止めてくれたことに安堵の気持ちでいっぱいになった。寄り添ってくれる人は、確かにいた。

「よろしく願います」

奥谷先生に見送られ、会議室を後にする。振り返ると、先生が遠くからでも分かるくらい大きく頷いてくれた。

学校を出ると、もう陽が落ち始めていた。空を見上げると、見慣れたはずの夕焼けが、一段と美しく映った。

about〇〇

2024年2月発行

著 者 井口由菜

デザイン 井口由菜